

長女

幸田いちか

次女

幸田いな

三女

幸田みつぎ

父

幸田哲夫

三姉妹の父。人気者であった祖父(哲夫の父)の背中を追い続け、巨大ザリガニを探し続けている。

祖母

幸田みほ

三姉妹の祖母。父の実母。新興宗教の熱心な信徒となった。

曾祖母

幸田あけみ

三姉妹の曾祖母。他界。幸田家に備えられた仏壇に祀られたままになっている。曾祖父の死をきっかけに新興宗教の信徒となった。

母・試食の女

幸田あずさ

三姉妹の母。幸田家から離れ、スーパーの試食コーナーで販売員をしている。

松倉

松倉まどか

三女のクラスメイト。母は新興宗教の熱心な信徒。

女1

長女が演じる。

女2

次女が演じる。

女3

三女が演じる。

【非登場人物参照】

祖父

三姉妹の祖父。立花神社の裏にある池で巨大ザリガニを捕まえ、新聞に載って人気者になった。病死後、幸田家の墓に入っている。

曾祖父

三姉妹の曾祖父。バイクに轢かれ他界。幸田家の墓に入っている。

幸田家の小さな庭の片隅。奥には縁側。上部には屋根。

三女がシャベルを持ってやってきて、庭の片隅で地面を見つめている。
セミの鳴き声。

三女 何がでるかな。

三女、シャベルを持つ手に力が入る。

三女 むかし、私は、ここに、穴を掘った。すぐくすぐく深く掘ったと思うんだけど、でも、それはちっちゃい時の記憶だから、今の私から見たら、すぐくすぐく浅いものだったのかもしれない。・・・緊張するね。記憶を掘り起こすって。私、ここに、何を埋めたんだろうな。楽しみだな。嫌な物、埋めてなきやいいな。誰かに掘りおこされてなきやいいな。

次女登場。同じく地面の片隅を見つめる。

次女 何がでるかな。

次女、一歩庭の片隅に近づく。

次女 妹は、昔から私と違って愛想がよくて、人からすっごく好かれてる。ずるいなって思ってた。そんな事言うのと嫌われるって思ったから、私は、妹の事を嫌いじゃないけど、ずるいずるいずるい！ って、叫びたかった。「王様の耳はロバの耳」みたいな？ 私は穴に向かって、叫ばなかった。・・・忘れた。私のストレスを全部吸い込んでくれる魔法の穴。そんな穴をずっと探している。

長女、その後ろから二人を覗き込むように登場。

長女 何が出ると思ってるのかな。

長女、二人から一歩距離を取っていたが、次第にその片隅に近づいていく。

長女 歯。そこには私と妹たちの乳歯が埋まっているはずだ。同級生はみんな屋根に向かって投げてたらしいんだけど。うちは、埋めた。クラスメイトに、うちも埋めるよって言う子もいた。でも、上の歯は埋めるけど、下の歯は普通、投げるって。全部埋めるのは・・・異常だって。え、うちだけ？ って、怖くなって、ギリギリグラグラの最後の乳歯を、えいや！と引きちぎって、天高くめがけて、投げた。

長女、振り返り、齒を屋根に向かって投げる。
かんからかん。

長女 私の最後の乳齒は、屋根に当たって跳ね返って、雨どいにぶつかって、跳ね返ってきて、ころりん、と、落ちてきて。結局、いつもの穴に吸い込まれていった。・・・私たちは、友達の家とは違うんだって、なんか理解した。

三女、シャベルを庭の片隅に振り下ろす。

三人 我が家、は、おばあちゃん、私たち、あと、おとうさん、の、5人、が、下国市御熊川町3¹/₂の一軒家に棲んでいた頃、の話。

暗転

一幕

車中。父が軽自動車を運転している。

父 私が勤めている下国市大町5¹/₁にある職場でつまらない時間を終え車で帰る途中、ふつと「ああ！今日は特別にビールが飲みたい！」という気持ちになり、いつもは直進する立花神社の交差点を右折、いつも立ち寄る立花4³/₃にあるコンビニ、には寄らず、立花通りを直進。(窓の外を見て)あれ、ここにあった、娘達が通っていた幼稚園、取り壊されてる…。変わるね。街は。いちいち気にしていたら人生がいくらあっても足りやしないんだ。ふうん。下国市松浦西2³/₁2。山田ストアへ。

父、スーパーに到着。この町にだけ3店チェーン展開している山田ストアの一店舗。

父 今の時間なら惣菜コーナーが半額になっているだろう。

女1・2・3登場。惣菜コーナーの一角でおしゃべりをしている。

父 店内の一角、惣菜の半額コーナーに、人間の、群れ……。嫌だね。浅ましい。私はあの群れには加わらない。そのまま惣菜コーナーを横目に鮮魚コーナーへ。そこには試食を薦める女性が一人。

試食コーナーの女性、ザリガニの試食を薦めている。

試食の女・・・お父さん！鮮度。艶。見て。他のお店じゃ絶対にこのレベルのザリガニ出さないから。あ、ザリガニはこの店でも出してないか。あは！
父 変なのに捕まってしまった、と思った。

試食の女 立花神社の裏に池があるでしょ。

父 はあ。

試食の女 立花池産。

父 ・・まさか。

試食の女 近所のおじいさんがね、取ってくるの。で、うちのオーナーがそれを買取る。オーナーの大好物だからね。

そこへ先ほどの女性3人、惣菜コーナーからやってくる。

試食の女 ほら、新鮮なザリガニ、食べていけない？食べるだけでいいよ！

女1 ええー？ ザリ¥ガニ？

女2 すいません、惣菜でエビフライ買ったからね。

女3 ザリガニだって。

試食の女 惣菜コーナーのエビはね、棄てるようなちっちゃい、味のしないエビを使ってるんだよ。それを何回使い回したかわからないような油で揚げて、昼過ぎまで残ったら同じ油で二度揚げしてあっため直して、味のしないエビからさらに味を抜いて、夕方まで売れ残ったものなんだよ。

女1 ええ？

女2 うそ

女3 やだ。

試食の女 それに比べてこっちのザリガニはフランスから昨日届いたばかりでぷりっぷり。油はしっかり味のしゅんだ3年もので素揚げに軽くお塩で完璧。外はカリッ、中はジュワッ。奥はフランス。グラムでなんと120円。

女1 私ちよっと、これ返してくる。

女2 あ、私も！

女3 それ200g置いといてね！

女性3人、去った。

父、軽蔑のまなざしで三人を見ていたが、

父 ・・フランス産？

試食の女 この空も、海も、どこかで必ずフランスにつながっているんじゃない？

父 そういうの、産地偽装って言うんじゃないですか。

試食の女 ・・あなたには本当のことを言ったわよ。

父 え、本当に？

試食の女 立花池から北側のところに、ガスタンクあるでしょ。あれ、82年にね、できたの。

あ、立花池と言えばさ、神社の宮司さんのお父さんがね、アル中で――

父 ―――ちよ――

試食の女 ―――で、神社のはす向かいにあるじゃない。お土産物屋さん。あそこの旦那さんとね、ほら。入れ墨がちよっとはみ出てる人、いるでしょ。あの人と、宮司さんの奥さ

んがね、浮気しててね、奥さん、深夜に、シャツターを開けて。こう、こつそり、ガラガラガラって。ガラガラ。3日に1回。

父 あの一——

試食の女 一——あ、ザリガニ、食べる？ほら、話、長くなるから。

父 いや、立花池のザリガニの一——

試食の女 一——だから、ほら、食べていいよって。

父 じゃなくて一——

試食の女 一——食べた。思い出すかもよ。

父 ……。

父、箸をとり、エビのようなものを箸で持ち上げ、食べる。

試食の女、去る。

父、野球帽をかぶる。そこは父の幼少期の夏休み。

父 ザリガニ、を、たくさん捕まえて人気者になりたい！と、思い、僕は夜中にこつそり立花神社の裏にある池に向かおうとした。ら、祖母に、見つかった。

幸田家。玄関のドアをこつそり開けようとしているところに、うしろから曾祖母が登場。

曾祖母 哲夫？

父 お、おう。

曾祖母 (帽子を見て) 何、どこに行こうとしてるの。

父 どこでもいいでしょ。

曾祖母 今何時だと思ってるの？

父 (時計を見て) ……1時。

曾祖母 早く寝なさい。

父 絶対起きるから。

曾祖母 いい加減な事言わないで。早く寝なさい。

父 ……おばあちゃんだって起きてるじゃない。

曾祖母 私は大人だからいいの。

父 なんだよそれ。何してたんだよ。

曾祖母 何、気になるの。

父 別に。

曾祖母 哲夫がもう少し大きくなったら教えてあげる。

父 なんだよそれ。

曾祖母 ほら、早く寝なさい。一人で起きて初めて大人なんだからね。

父 うるさいな。

曾祖母 言うこと聞きなさい。ぶつよ！

父 ……わかったって。

父、帽子を脱ぎ、すごすご部屋に戻る。

曾祖母　朝、起こさないからね。自分で起きなさいよ。

曾祖母、ため息をつき、仏壇の前で正座をする。

曾祖母　本当、ろくな事考えないんだから。あの子は・・・血筋なのかしら。ぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつ・・・。

父、こっそり戻って陰から曾祖母を見ている。

曾祖母、仏壇に向かってお題目をぶつぶつ唱えている。

父

祖母、は、僕にはわからない言葉を、僕には分からないものに話し続けている。僕は、ザリガニを捕まえて人気者になりたい、ので、見ない事にして、家を出た。見ない事にしてから、37年も過ぎた・・・ザリガニは・・・どこだ？

父、ふらふらと家を出る。

曾祖母　ぶつぶつぶつぶつ・・・早く帰っておいで・・・ぶつぶつぶつぶつ・・・

暗転

居間。

先ほど曾祖母が座っていた場所で、祖母がぶつぶつぶつとお題目をあげている。幸田家の居間。

長女登場。不機嫌そうに祖母の背後に立つ。

長女　おばあちゃん。

祖母　・・・ん

長女　ずっと起きてたの。

祖母　・・・ん。

祖母、ぶつぶつと唱え続ける。

長女　それ。うるさくて寝れないんだからね。

祖母　・・・誰のおかげで大きくなったと思ってるの――

長女　――は？

祖母　・・・ぶつぶつ

長女　（見まわして）お父さんは？

祖母 …… 仕事じゃないの
長女 今日土曜だよ。あ。

長女、祖母がお題目をあげている仏壇と対称の位置に置いてあるテレビをつける。
C M。祖母、構わず唱え続ける。

長女 もうすぐ見たい番組はじまるんだからね。
祖母 どうせくだらないアニメでしょ。
長女 これ見ないと友達と話できないんだから。
祖母 くだらない付き合いはやめなさい。
長女 関係ないでしょ。
祖母 あるでしょ。家族なんだから。
長女 ……。

三女、起きてきて居間へ。

三女 おはよー
祖母 はい、おはよう。
三女 おばあちゃん、今日学校終わったら友達と立花池でピクニックするからさ、おにぎり
祖母 すすんでよ。ね。お願い。
祖母 しかたないねえ。

祖母、ゆっくり立ち上がり台所へ。

祖母 何個いるの？
三女 うーんとねえ…4個。
祖母 ええ？（炊飯器の中を見て考え込む）
三女 だって、ちひろちゃんもみなちゃんも、おばあちゃんの塩むすび美味しいって言うんだもん！
長女 何が美味しいの。味しないじゃん。
三女 えー？シンプルでいいじゃん。
祖母 もう一品つけとくね。
三女 やった！

祖母、おにぎりをむすび始める。

三女 おかずは？
祖母 内緒。
三女 あれ！お母さんが作ってくれるエビのあれがいい！

間

長女 あんたこないだ歯抜けたばっかなんだから。

三女 えーあれ食べたい。

祖母 あれはね、今日はないから。

三女 えー。あれとおにぎり一緒に食べるの好きなのに

祖母 ごめんね。

長女 あんたさ。あれはお母さんが――

祖母、調理器具を強くたたきつける。

祖母 ・・ああ、ごめんごめん。手が滑っちゃって。

三女 もーびつくりするじゃん！ あ、新聞来てるか見てくるね！

祖母 はい、ありがとうね。

三女、玄関の方向へ去った。

長女 ・・なんで言わないの。

祖母 あの子はまだ小さいから。

長女 もう1か月だよ。

祖母 (ぶつぶつ唱えながらおにぎりをむすんでいる)

長女 あの子もバカなんじゃない？なんで変だって思わないの？異常だよ。

祖母 異常だと思ってるのはあんただけだよ。

祖母、自分の部屋へ去ろうとする。

長女 え、何、どこいくの。

祖母 眠くなっちゃった。これ(おにぎり)あの子に渡しといて。

祖母、去る。沈黙。テレビの音だけが居間に残る。

長女 ・・お母さんいないのが、なんで普通なのよ。

次女、居間に登場。よそよそしい。

次女 おはよ。

長女 何、ずっと聞いてたの。

次女 ばあちゃん苦手だからさ。牛乳とって。

長女 バカ。自分でやれ。

次女 はいはい。

長女 お父さん、見てない？
次女 仕事じゃない？ あ、土曜か。ついにお母さん探しにいったかな。(テレビを見て)
長女 あ、お姉ちゃんの好きなアニメはじまるよ。
長女 は？ 好きじゃないし。
次女 お姉ちゃん、もつと素直になりなよ。好きじゃないテレビなんて見なくていいじゃん。
長女 ……だって、話入れないじゃん。
次女 私、随分入ってないなー それはそれで楽しいけど。
長女 あんたが特殊なのよ。
次女 話合わせてばかりだと、おばあちゃんみたいになっちゃうよ。
長女 あの人全然話合わせないじゃん。
次女 合わせてるじゃん。仏壇と。

三女、新聞を持って居間に戻ってくる。

三女 あ、おはよ！
次女 はい、新聞貸して。
三女 あれ、おばあちゃんは？
次女 (新聞を取って) 眠いって。
三女 えー？おにぎりは？
次女 はい、世界は今日も平和ですって。(新聞を三女に返す)
三女 どこ？
長女 作ったって言ってたよ。
三女 そっか。おばあちゃんにお礼言ってくる。
長女 寝るって。
次女 起こせばいいじゃん。
長女 起こしたらうるさいでしょ。
次女 お礼言いたいって言ってんだから、起こせばいいんだよ。
長女 うるさいんだから起こすなって言うてるの。
次女 どっちの味方なのさ。
長女 味方とか敵とかの話してないでしょ。
三女 ええー？どうしたらいいの？
次女 自分で決めな。
三女 えー (テレビを見て) あ、いち姉ちゃん、始まつてるよ。
次女 (無言で笑う)
長女 ……今日は見ない。
三女 ふーん。おばあちゃん！

三女、祖母の部屋へ向かう。

次女 いいの？ 見なくて。

長女 いい。
次女 学校、大変なんじゃないの？
長女 うるさい。

長女、悩み、テレビの前に座ってしまふ。
その姿はまるで仏壇を拜んでいるようだ。

次女 面白いの。それ。
長女 うるさい。
次女 生きづらいねえ。

テレビをじっと見つめる長女。
父、玄関から帰ってくる。

父 (長女を見て) おい、今日学校だろ。早く準備しろよ。
次女 いち姉ちゃんは学校の準備中です。
長女 うるさい。
父 テレビ見てるじゃないか。
次女 学校でこれ見てないと人気者になれないんだって。
父 ……
長女 そんなじゃないって。ていうかうるさいよ。ぶつよ。
次女 (笑って) いや、目、一つも離さないじゃん。
父 (長女にぐっと近づき)……がんばれよ。

長女、次女、父をぎよつとした目で見ると見る。

長女 え、何気持ち悪い。
父 学校で人気者になれるなら、見なさい。しっかり見なさい。それなんだ。アニメか。
長女 うん。
父 それはなんだ、みんな見てるのか。
長女 全員見てる。
次女 うそでしょ。
父 どんな話なんだ。
次女 すごい食いつくじゃん。
長女 ぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶ…

長女、アニメの説明を長々とするのだが、ぶつぶつと念仏のようにしか聞きとれない。
説明が終わる。

父 ……すごいな。

次女 どころか？

父 ほら、なんていうか、凄い、覚えてるんだなって。

次女 ・・お母さん、いた？

父 え、何。

次女 お母さん探しに行ってたんでしょ？

父 散歩だよ。

次女 は？ お母さんいないのに散歩してたの？ え、散歩ってこう、もっと心の余裕がある人がやるやつでしょ。

父 それは、あれだよ。立花池の方まで行ってきたよ。

長女、
たまらず、

長女 は？お母さん池に沈んでるってこと？

父 違うよ。違う。

長女 じゃあ何で立花池なんて――

父 ーそれは、ほら、散歩も兼ねてるから。

長女 お母さん探すのに散歩兼ねるなよ。

父 日の光を浴びないと昼前に眠くなっちゃうだろ！

長女 お母さんいないのに眠くなるなよ！

父 そんなこと言ったら、お前だって、それ見てるじゃないか。

長女 これは見ないと学校で大変なことになるの！

父 それは、そうだな。がんばれ。

次女 一週ぐらいいいでしょ。

長女 今日はぶつぶつぶつぶつとぶつぶつぶつぶつとぶつぶつが登場するの！ぶつぶつぶつがぶつぶつぶつぶつぶつぶつだからぶつぶつぶつぶつぶつが起るの！で！ラストでぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつになっちゃうらしいの！今日山場なの！

次女 え、それ今日の話？

長女 そうだよ。

次女 なんで内容分かってんのに見てんの？

長女 細かいところは実際目で見ないと分かんないでしょ。

次女 ていうか、なんで内容分かってんの？

長女 インターネットなめんなよ。

父 あ！俺の携帯勝手に使うなって言ってるだろ！

次女 話分かってんなら、その時間でお母さん探せばいいのに。

長女 お前が言うなよ！寝てただけの癖に。

沈黙。父は携帯のポケット量を見ている。

次女、その携帯を奪い取る。

父 やめろって！

父、奪い返そうとする。

次女、もみくちやになりながらも電話をかける。

次女

警察ですか！

父、動けなくなる。

次女

あ、はい、あの、ええ。母親が先月から行方不明なんです。はい。先月。思い当たる所はすべて探したんですけど。ええ。まだそんな年じゃないです。はい。元気な人なんです。はい。ええ。下国市、御熊川町、3の、2。はい。一軒家です。あの、私学校いかなきゃなんですけど。お父さん？ええと・（父を見る）はい。私に対応します。はい。はい。あ、はい来られたときに、お伝えします。え、私が行ったほうがいいんですか？はい。ありがとうございます。御熊川町3の2。幸田にいます。30分ぐらいで。はい。はい。お願い致します。ありがとうございます。

次女、電話を切った。

次女

警察、30分以内に来るって。それ（アニメ）終わってるね。よかったね。

長女

・・・

次女

お父さん、どうする？ 会社いく？

父

・・・土曜だよ。

三女、戻ってくる。

三女

ねえ・・・おばあちゃん息してないんだけど。

長女、次女、父、一問あって驚く。

三女の後ろから祖母が顔を出す。

祖母

ばあ。

三女

あはは！ 本当、おばあちゃんの言う通りだった！ めっちゃ驚いてた！

祖母

んふふ。面白い顔だったねえ。

三女

（三人の驚き顔をマネをする）

祖母

んふふ。あんたもいい演技するねえ。ね、おばあちゃん、あの子たちが驚く事、全部知ってるから。おばあちゃんの言うこと聞いてたら、楽しいよ。

三女

おにぎりも食べれるし、最高じゃん。

父

いい加減にしろよ。

祖母

哲夫、会社行かなくていいの。

父

土曜だよ。

祖母 あんたいつまでそれ見てんの？
長女 うるさい。あんたも仏壇しか見てないじゃん。
祖母 お！！仏壇！
長女 ていうか只の箱だから。
祖母 あんたたちのひいばあちゃんがお祀りしてあるの。
長女 ・・・墓に入れてあげろよ。
祖母 あんた達のひいばあちゃんが望んだことなの。(父に)ね。
父 ・・それは、まあ、今はいいじゃないか。
次女 警察来ますよ。
祖母 え？
父 うるさい。
祖母 何、なんで警察がくるの(父に)ねえ。
三女 警察くるの？

父と長女と次女、三女を見る。

父 お前は学校に行きなさい。
三女 はい。

三女、出かける準備をする為に自室に戻る。

間

長女 ・・なんですすぐどつかいっちゃうのよ！この状況で！
次女 警察きますよ。
父 そうだよ。そうだった。それが大事だろ、今は。ていうかなんで警察がくるんだ？
次女 いや私呼んだから。
父 じゃなくて、なんで呼んだんだ。
次女 お母さん、いないじゃん。
父 お母さんは、そうだよ。いないよ。だからなんで呼んだんだ。俺はずっと探してるんだぞ。お父さんを信用できないのか？ できないのか！
長女 散歩してただけでしょ。
祖母 あ、晴れてたかい？
父 ぴーかんだよ。ぴーかん。
祖母 ぴーかん。言葉遣いに気をつけなさい！ そんなんだから逃げられるんだよ！
父 関係ないだろ！ ていうか、ぴーかんの何が悪いんだよ！
祖母 あんたはいつだって信心が足りないから言葉遣いも――
父 ー――関係ないだろ！ 今！今はぴーかんがどうかって話だろ！
祖母 ぴーかんって言うのやめなさい！
父 じゃあなんて言えばいいんだよ！

祖母 お天道様がにっこり微笑んでいた。
父 比喩で話すなよ！
長女 ああ！（テレビ）終わっちゃったじゃん！

長女、テレビを消して立ち上がる。

長女 全然内容入ってこなかったよ！

三女、着替えて居間へ戻ってくる。

三女 おばあちゃん、おむすびありがとうね。

遠く、パトカーのサイレン。

三女、台所へ。

三女 え！3個しかないじゃん！ まーちゃんの分足りないじゃん！
祖母 ごめんね。

長女 どうせ味しないんだから空気でも握って持っていけばいいじゃん。
祖母 あんたも信心が足りないから味が分からないんだよ！

長女 ふりかけかけろよ！
祖母 ふりかけなんて添加物の固まりでしょ！
三女 え？空気って握れるの？

父 握れるわけないだろ！

長女 なに怒ってるの！？
父 怒ってないよ！

三女 え、お父さん、怒ってる？
父 ・・怒ってないって・・な、ほら。ぱあ。

父、にっこり。三女、からから笑う。

三女 もーお父さんに免じて3個で我慢する。まーちゃんは、まあ、いいや。私あの子あんまり実は好きじゃないし。今度はエビのあれもお願いね。

三女、ニコニコと笑い、家から去る。

長女 ・・エビのあれは・・ないんだよ。

パトカー、かなり近づいてくる。

4人に緊張感のはしる。

祖母 ……まーちゃんに、悪いことしたねえ。
長女 ……誰だよ、まーちゃんって。
父 ……友達だろ。
祖母 ……そうなの？
父 ……知らないけど。
次女 ……でも好きじゃないって言ってたじゃん。
長女 ……じゃあいらないじゃん。
父 ……あの子は、うまくやろうとしてるんだよ。
長女 ……なに。
父 ……あの子のまわりの社会と、うまくやろうとしてるんだよ。
次女 ……いち姉ちゃんと一緒だよ。
長女 ……は？
祖母 ……悪い事、したねえ。
長女 ……エビのあれ持たせたらいいんじゃないの。
父 ……エビのあれは、見つからないんだよ。
次女 ……どこにいるの？
父 ……どこにいつちやったんだろうな。

パトカーの音、大きく。

曾祖母が骨壺を持って仏壇から登場。

彼らの背後に佇む。

誰も曾祖母には気づいていない。

曾祖母

うー（骨壺を頭に乘せて、パトカーのサイレンの口真似）

暗転

夜。雨。山田ストアの駐車場。

ハザードランプの明かりが霧散して広がっている。

父が車の運転席で、ハザードランプに合わせて、かっちかっちとつぶやいている。

父

下国市松浦西2-3-12、山田ストアの駐車場。私は、「人気者になりたい！」という、この年になるまで追いかけてきた自分の行動原理について、なぜ？と、ぼーっと、考えていた。長女も、三女も、人気者になりたがっている。次女は何を考えているのか分からない。なんで警察なんて呼ぶんだ。くそ。かっち。かっち。かっち。かっち。ハザードランプの音に合わせて思考を揺らす。かっち。かっち。かっち。かっち。かっち。試食の女の事を、ふっ、と、思い出した。だから今、ここにいる。あいつはとても人気者だった。くそ。ザリガニで釣りやがって。くそ。産地偽装までして人気者になりやがって。くそ！…かっち。かっち。かっち。かっち。かっち。かっち…あいつは、ザリガニ

を売っていた。一口食べたザリガニは、輸入物の食用ザリガニみたいにさっぱりして
いなくて、立花池特有の泥臭いものに似ていた。あれは、絶対に、そうだ。かつち。
かつち。かつち。かつち……

そこへ、試食の女が傘を持ってやってくる。車の窓をコンコンとノック。

大雨の為、試食の女の声は最初聞こえない。

試食の女 (窓、開けてくれますか?)

父 なに。

試食の女 (これ(窓)、開けて、もらえないかな? 雨、強くって)

父 ……

父、助手席側の窓をパワーウィンドウで開ける。

雨の音がより強く車中に染み入る。

試食の女 もう。

父 ぼーっとしてて。

試食の女 何、私待ってたの? ……やだ。照れる。

父 ……

試食の女 冗談よ。

試食の女、ドアを開けようとするが開かないので、ノックする。

試食の女 これ、開けてもらってもいいかな。

父 え。

試食の女 大丈夫、変な事しないから。私が言う事じゃないか。はは。

父、鍵を開ける。

試食の女、傘を閉じて扉を開けて助手席に座り、扉を閉める。

試食の女 もう。すごい濡れちゃったじゃない。

父 セクシーだよな。お前。

試食の女 やめて。

父 はいはい。

沈黙

試食の女 そういうとこ、嫌いじゃないよ。あはは。

父 ええ?

試食の女 本気じゃないから。で、どうしたんですか？御用があるんじゃないですか？
父 いや、その・・・言葉になっていない事を伝えるのが苦手で
試食の女 誰でも苦手なんじゃないですか。でも、言葉にしないと伝わらないでしょ。
父 僕は、そうは思わない。
試食の女 じゃあ、どうやって伝えるんですか。
父 ・・ものをあげるとか。
試食の女 買取じゃん。
父 でも――
試食の女 ――例えば商売。物を売る。物を買う。喜ぶ。お金を払う。お金をもらう。喜ぶ。
去る。以上。商売。それ以上でもそれ以下でもない。好きだな。私。
父 商売の話してないだろ。
試食の女 比喩でしょ。
父 比喩で話すな。
試食の女 商売。私が好きな所をあなたは嫌い。それだけ。
父 ズルいだろ。
試食の女 商売のいい所は、あと腐れがない所だと思う。
父 違う。そうじゃなくて――
試食の女 ――早く判子押してもらえないかな。それで済むって言うてんの。

沈黙。雨音。

父 ・・・もうちよつと、こう、なんか、あるだろ。
試食の女 他人には説明出来ない理由を変にこじらせて、こんな時間まで待って、待って、待ち伏せするような人の事、社会ではなんて呼ぶと思いますか？ ストーカー。
父 でも、家族だったら、こういうの普通――
試食の女 ――家族じゃないでしょ。実際。もう。
父 ・・。
父 ・・犯罪者。
父 は？
試食の女 ここ、スーパーの敷地内。このお店、とつくに閉店してんの。ほら、あそこ。警備員さん、すっごい見てる。私が入ったから、ああ、そういう事かって黙ってみてますけど、私が大声出したら、飛んできてくれる。
父 よく聞け。俺には、俺の理由があつてな？
試食の女 説明できない理由ですよね。おっきい声だしますね。

父、慌てて女の口をふさぐ。

雨の音の奥で、遠くパトカーの音。

父、ゆっくりとふさいだ手を放す。

父 ・・ごめん・・・つい。

試食の女 …… 今のは、言い過ぎた。ごめん。
父 ……。

試食の女 悪いと思ってないのに謝るんだ。意外。
父 思ってるよ！

試食の女 大きい声ださないで。

パトカーの音、少し大きくなる。父は気が付き、

父 くそ。

車のエンジンをかける。

試食の女 …… え、え、何。うそ、攫うつもり？

父 あの、ちよつと、ごめん、ちよつと、ちよつとだけ、付き合ってくれ。

試食の女 いやよ。(出ようとする)

父 本当にちよつとだけ！

エンジンを強くふかす。クラクションを鳴らす。

父 あのザリガニがどこにいるのかだけ教えてくれ！ 何もしない！ お前に誰が何かするんだよ！

急発進。

曾祖母、後部座席からぬつと登場。

骨壺を持って佇んでいる。

曾祖母 うー

暗転

幸田家。仏壇の上で曾祖母が骨壺を持って立っている。

曾祖母 うー

祖母、その様子を発見し、慌てて曾祖母に近づく。

祖母 お母さん！骨壺で遊ばないでください！

祖母、曾祖母から骨壺を取り上げる。

祖母　　これで何回目なんですか！

曾祖母、祖母から骨壺を取り上げる。

曾祖母　　うー

祖母、曾祖母から骨壺を取り上げる。

祖母　　もう！

曾祖母、祖母から骨壺を取り上げる。

曾祖母　　うー

祖母、曾祖母から骨壺を取り上げる。

祖母　　もう！

曾祖母、祖母から骨壺を取り上げる。

曾祖母　　うー

何度かそのやり取りが繰り返されたのち、

祖母　　いい加減にしてください！　何度も何度も！

曾祖母　　お父さん、返してください。

祖母　　・・・。

曾祖母　　お父さん、返してください。

祖母　　（隣の部屋に向かって）あなたもいい加減なんとか言っ

返事はない。

曾祖母　　あの子はザリガニを探しに行ったよ。

祖母　　・・・もう！

曾祖母　　うー

祖母　　・・・ほら、勤行の時間ですよ。

曾祖母　　うー

祖母　　もう！

祖母、仏壇の前で正座する。

祖母　　ぶつぶつぶつぶつ・・・(小声で)死ね・・・死ね・・・!できるだけ早く死ね!
曾祖母　　うー

曾祖母、仏壇の上に立ち、うーうーと言っている。

祖母、仏壇の前で突っ伏してしまふ。

曾祖母、窓の外を眺める。

明かり変わり、同じく幸田家の居間。仏壇の前に祖母、そして三女。

仏壇の上には変わらず曾祖母がいるが、二人にはその姿が見えていない。

窓の外、雨が強い。

祖母、顔を上げて三女に顔を向ける。

三女、おにぎりを頬張り、祖母を見ている。

前のシーンは祖母が三女に語っていた思い出だったのだ。

三女　　大変だったんだね。

祖母　　大変だったんだよ。あの時は。

三女　　なんで？

祖母　　・・・なんで？

三女　　なんで、ひいおばあちゃん、うーうー言ってたの？

祖母　　(涙ぐむ)

三女　　なんで？

祖母　　・・・なんでだろうねえ。いい人だったよ。

三女　　え？

祖母　　ん？

三女　　おばあちゃんは、ひいおばあちゃんの事、嫌いだったんだよね。

祖母　　嫌いじゃないよ。

三女　　でも死ねって言ったんでしょ。

祖母　　あの時だけ。本当に、あの時、魔が差したのかもしれない。

三女　　でも言ってたじゃん。

祖母　　あんたもそうなら分かるよ。

三女　　ふーん。ひいおばあちゃん、ひいおじいちゃんの事が好きだったんだね。

祖母　　あんたのお父さんのお父さんのお母さんは、お父さんのお父さんのお母さんの旦那さ

んのこと、お父さんのお父さんのお母さんはとても好きだったの？

三女　　・・・なんて？ え？ 誰？

祖母　　あんたのお父さんのお父さんのお母さん、は、あんたのお父さんのお父さんのお母さ

んの旦那さんの事、とても好きだったの。

三女　　・・・ひいおばあちゃんが・・・ひいおじいちゃんの事が・・・好きだったって話？

祖母　　あんたにとっては何。そう、あんたのお父さんのお父さんのお母さん、は、お父さん

のお父さんのお母さんの旦那さんの事、あなたにとってのひいばあちゃんはとても好きだったって話。

三女 うん。は？ え？

祖母 それが原因なの。

三女 うーうー言ってた？

祖母 あんたのお父さんのお父さんのお母さん——

三女 ——ひいばあちゃんね。

祖母 あんたのお父さんのお父さんのお母さんの旦那さんの事がとっても好きでね。

三女 それ聞いた。ひいおじいちゃんね。

祖母 事故で亡くなっちゃったの。

三女 え。

祖母 バイクに轢かれて。

三女 そうなんだ。

祖母 あの頃は暴走族が多くて。

三女 へえ。この町にもいたんだ。

祖母 で、あんたのお父さんのお父さんがね。

三女 あ、うー。おじいちゃん。

祖母 立花池でつかいザリガニを取ったって、新聞に載ったの。

三女 へえ！

祖母 その日からね、あんたのお父さんのお父さんは、また新聞に載りたい！って何度も何度も立花池に通ったのさ。それで心配してあんたのお父さんのお父さんのお母さんの旦那さんは立花池にあんたのお父さんのお父さんを探しに行く最中に、暴走族の子に撥ねられちゃって。まだ未成年でね、捕まらなかつたんだけどね。

三女 えーっと。あ、お父さんがザリガニ探してるのも、おじいちゃんの影響だったってこと？

祖母 そうね、そうかもしれない。あの子がザリガニザリガニ言ってるのは、あんたのお父さんのお父さんが残した呪いみたいなもんかもしれない。

三女 おじいちゃんね。で、ひいばあちゃんがうーうー言ってた理由は？

祖母 ああ。その時ご近所の方の勧めで教会に入ってたね。旦那さんが帰ってきますようにお祈りしましょうって。それであんたのお父さんのお父さんのお母さんは帰依したの。

曾祖母 うー……ぶつぶつ……ぶつぶつ……

祖母 でも、あんたのお父さんのお父さんのお母さんの旦那さんは帰ってこなかったし、犯人も未成年だからって起訴されなくてね。警察を恨むようになった。

三女 (仏壇を見て) ひいおばあちゃん、かわいそう。

祖母 その日から、パトカーになっちゃったの。

三女 うん。……ん！？

祖母 私が捕まえてやる。絶対について。

曾祖母 うーうー

祖母 それから、勤行とパトカーだけの人になっちゃってね。

曾祖母 うー……うー……(曾祖母、骨壺を天に掲げる)

三女 へえ。(おにぎりを頬張る)
祖母 私も教会に通わせてもらおうようになって、あんたのお父さんのお母さんと毎日毎日教会に通ってね。
三女 色々あったんだね。

祖母、座り直し、三女に近づく。

祖母 そこで・・あんただからお願いするんだけど。
三女 なに。おにぎりむすんでくれたからなんでも聞くよ。おかず入ってなかったけど。
祖母 私が死んだらね
三女 いやな事言わないでよ。
祖母 でも、いつか、だれにでもやってくるの。
三女 さみしいね。あ、こんぶ入ってる。
祖母 私が死んだら、このお仏壇に祀っておいてほしいの。
三女 うん。
祖母 で、あんたのお父さんのお父さんのお母さんの骨はね。
三女 ひいおばあちゃん。
祖母 鳥葬にしてほしいの。
三女 ちょうそう？
祖母 人もね、墓に入るだけが人生の終わりじゃないの。
三女 ごめん、ちょうそうってなに？
祖母 神様のお使いである鳥に、肉体のすべてを天国まで運んで頂くの。
三女 でももう骨なんだよね。
祖母 最後までお題目をあげた人は、骨まで天国に運んで貰えるから。
三女 ええ。いやだ。
祖母 あんたのお父さんのお父さんのお母さんはね、本当は肉も鳥に運んでもらいたかったはずなの。でもあんたのお父さんのお父さんも、あんたのお父さんも、それをいやがってね。

三女 おじいちゃんとお父さん。

祖母 だからあんたのお父さんのお父さんのお母さんは今もあそこに置きっぱなしになってる。ぎりぎりの折衷案としてね。

三女 ひいおばあちゃん。望んだわけじゃないんだ。

雨音と曾祖母がうーうー言う声が強くなっている。

祖母 お義母さん・・あんたのお父さんのお父さんのお母さんが果たせなかった夢を、私は叶えてあげたいの。ね。無念でしょ。それが出来るのは、この家族で、あんただけなの。

三女 なんて私なの。

祖母 あんただけが、この家族でちゃんと私の言う事を聞いてくれる。ね。そうでしょ？

三女 おばあちゃん。
祖母 なんだい。
三女 あ、ごめん。私の、お父さんの、お母さん。
祖母 おばあちゃん、でいいよ。
三女 お父さんのお母さんは、ちようそうじゃなくていいの？
祖母 ・・私は、いいの。
三女 お父さんのお母さん。
祖母 おばあちゃん。
三女 だって、おばあちゃんはみんなの事、そう呼んでるよ。
祖母 ・・。
三女 家族だと思っけてないの？家族の中の人、なんでそんな風に呼ぶの？
祖母 ・・。

三女、曾祖母の手から骨壺を取る。

三女 ちよーそー

三女、骨壺の上に掲げてふぎける。沈黙のち、祖母、笑う。

祖母 いいね。それ。

三女 ・・ちよーそー！

祖母 あはは！やめて、やめて。

三女 ちよーそー！！そおお！！！！

祖母 あははは！！！！ほら、勤行の時間よ。ほら、座って。

祖母、正座する。

三女、横で正座する。

三女 ちよーそー！！！！！！

祖母、曾祖母去り、三女だけが一人仏壇の前で座る。

三女 ・・ひいおばあちゃんがどんな人だったか、全然わかんなかったな。

少し遠く、車がエンジンをふかしながら走り抜ける音が聞こえる。
その後ろをパトカーが追尾し「止まりなさい！止まりなさい！止まりなさい！」と警察官の静止する声がかすかに聞こえ、やがて雨の音にかき消された。
三女、最後のおにぎりを頬張る。

三女 あれ。味しないな。

居間の奥、玄関の方から祖母が長女を叱っている声が聞こえる。

三女 おばあちゃん、素直じゃないなあ。

長女も祖母に呼応するように怒鳴りはじめる。

三女 いち姉ちゃんも、素直じゃないなあ。

三女、おむすびを頬張る。

三女 エビのあれ、食べたいな！・・・私だけ、素直。

次女、喧嘩から逃げるように居間へやってくる。

次女 まただよ。

三女 にい姉ちゃん。

次女 ん？

三女 お母さん、どこにいったの？

次女 ・・・どこだろうね。警察が見つけてくれるよ。

三女 ひいばあちゃん、ここにいるんだよね。

次女 え？

三女 ずっとここにいるの、息苦しくないのかな。

次女 ・・骨なんだから大丈夫だよ。

三女 ちょうそう、してあげたほうがいいのかなあ。

次女 ちょうそう？

三女 そっか。知らないんだ。今日は雨だから、また今度にしよう。

次女 なに、ちょうそうって。

三女 にい姉ちゃんもその時は手伝ってよ。

三女、仏壇に骨壺を戻し、「ちよーそーちよーそー」と言いながら去る。

やがて台所近くにある電話が鳴る。しかし電話には誰も応答しない。

仕方なく次女がとる。

次女 はい幸田です。はい。あ、私、姉です。はい。・・・お父さんとお母さん、今いなく

て。ごめんなさい。・・・みつき？はい、妹です。・・・すいません。え、あ、はい。

メモします。松倉まどかさんの、お母さん。はい。みつきが、まどかさんを、池に、

落とした。・・・え。・・・みつきが？・・・はい。すいません。はい。わかりました。

帰ったら、伝えます。あの、まどかさんは、ケガ・・・折れてるかも。はい。はい。

あの、すいません、みつき、は。・・・いけません。はい。帰ったら聞いておきます。

父、試食の女から懐中電灯を奪い取る。

父　暗いなかで、こうやって照らすと、いつもより、もっと広く感じる。奥行を無限に感じる。下国だって、他に比べたら小さな町だ。でも、こうやって見ると、北海道ぐらい広い気がする！

父、懐中電灯を持って明かりの先に進んでいく。が、すぐに戻ってくる。

父　傘。

試食の女　え？

父　傘、横で差してて。

試食の女　え？ 私あなたの女？

父　別に、女じゃなくなたって、相合傘したっていいでしょ。

試食の女　相合傘って。嫌です。

父、懐中電灯をその場に落とし、扉を開けて試食の女を車外へ放り出す。

試食の女　ちょっと！

父　教えてくれよ！ ザリガニがどこにいるのか！

試食の女　知らないわよ！ もう離して！

試食の女、父を引き離し、地面に叩きつける。

父　いた！

試食の女　え、あ、ちょっと、大丈夫？

父、ぐいっと試食の女を抱きとめる。

試食の女　ちょっと・・・

父　もう、疲れた・・・。

試食の女　・・・じゃあ、止めたらいいいじゃない。

父　・・・もう、止めちゃおうかな

試食の女　全部終わらせた方が楽なんじゃない。あなたも。

父　離婚って事か

試食の女　ずっと言ってるじゃない。

父　あの子たちはどうするんだ。

試食の女　話し合って決めましょう。

父　なんで、お前は、そんなに冷静なんだよ

試食の女　私は決めてたから。ずっと前から、あなたよりずっと前から、あなたより疲れてて、

ずっと考えて、それで決めたから。

その後、曾祖母が現れる。

曾祖母

うー

父

うわっ！！！！！

試食の女

え！え！なに？

父

助けてえ！

試食の女

助けてほしいのはこっちなんだけど！？

父、身をひるがえし、懐中電灯を拾い、うーうー言ってる方に向ける。

そこには曾祖母が立っていた。しかし試食の女にはその姿を見ることが出来ない。

曾祖母

哲夫。

父

おばあちゃん！！

試食の女

おば？！・・・

父、懐中電灯を落とし、曾祖母に抱き着く。

試食の女

ぎゃー！！！！

曾祖母

やっぱりここにいたんだね。

父、暗闇の中に紛れる曾祖母をじっと見つめる。

曾祖母

哲夫、ごめんね。寂しかったね。大丈夫。

父、曾祖母に抱き着きむせび泣く。

試食の女

(真っ暗でなにも見えず) え？ え？

父

おじいちゃんが死んで、おばあちゃんは念仏しか唱えなくなって、お父さんはザリガニを探さなくなって、お母さんも念仏しか唱えなくなって。お父さんも死んじゃって。

曾祖母

ごめんね。さ、家に帰ろう。

父

寂しかった。寂しかった。寂しかった。

曾祖母、父の手をひき、暗闇の中へ消えていく。

父

ザリガニ・・・ザリガニ・・・ザリガニ・・・どこだよ・・・

試食の女、懐中電灯をゆっくりと拾い、暗闇を照らす。

雷が近くの木に落ちたようだ。

池を取り囲む木々から眠っていた鳥が一斉に飛び立つ。

二幕

暗闇の中、音楽。

長女、次女、三女、登場。

それぞれの別の場所で語る。

長女 朝、家に警察がやってきた。

次女 父はいつの間にか、いない。

三女 父は私にだけこっそり教えてくれた。お母さんを探してくる、って。

長女 警察の事情聴取。ばあちゃんが対応。

次女 私といち姉ちゃんは学校に行くよう促され、登校。

三人 学校。土曜日。

長女 あのアニメ誰も見てなかった。・・よかった。私も見てない！

次女 一時間目。二時間目。三時間目。どす黒い雲が下国の街に垂れ込め始める。

三女 ちひろちゃん、みなみちゃんと、今日のピクニック計画を立てる。まーちゃん横でう

んうん頷くだけでウケる。

三人 下校。

長女 図書館で一人。本を読む。車、免許。取り方。

次女 どこともなく、街を歩いて、山田ストア。知らない人が、冷凍ハンバーグの試食を勧

めている。

三女 一回家に帰ってから立花池に集合って事になったけど、わたしもおにぎりも持って準

備万端だから、ちひろちゃんに着いて行く。でも、ちひろちゃんのお母さんが「雨が

降るからやめなさい」って。バイバイ。みなみちゃん家に行ったらやっぱりおんなじ。

みなみちゃんのお母さん。怖い。バイバイ。後ろを振り向いたら、笑顔のまーちゃん。

しかたなく二人で立花池へ。

警察官、仕事。読む。・・難し。

次女 1時間眺める。ハンバーグをもらう。あったかい。

三女 到着。少し雨。まーちゃん、濡れた草に足を滑らせてコケて池に片足はまる。ウケる。

長女 断念。眠い。バイク、免許、取り方。

次女 2時間経過。ハンバーグをもう一つもらう。「お母さんは？」と聞かれる。いません。

と答える。もう一つハンバーグを貰う。

三女 まーちゃんが足を滑らせたときのモノマネを1時間。似てなくなった気がして、まー

ちゃんにもう一回落ちてって頼む。マジで落ちる。ちよつと血が出て、ひく。帰ろう

としたら、まーちゃん「家、遊びにいい？」って聞いてくる。断る方が面倒く

さい気がして、適当に、いいよ、って言う。「靴下履き替えてくる」って笑顔で走るま

ーちゃんを見送る。帰路。

長女 るるる。北海道、沖縄、香港、マカオ、ベトナム。北欧・アメリカ、インド、アフリ

次女 カ、チリ。フランス……。すっかり、夜。脳内はるるぶ。帰路。
3時間経過。また違う知らない人がやってくる。その人にもハンバーグをもらう。「お母さんは？」と聞かれる。もうひとつ、ハンバーグをもらう。エビのあれが食べたい。夜。帰路。

三人 いち帰路。に帰路。さん帰路。足が、重い。

三女 帰宅たたいまー。おばあちゃん。目に見えて疲れてる。かわいそう。ちよーそーの話
を聞く。楽しそう。

長女 帰宅たたいまー。ばあちゃんに警察と何を話したのか聞く。「子供は知らなくていい」と言う。喧嘩。疲れる。

次女 帰宅たたいまー。姉と祖母、喧嘩。うるさい。ちよーそー？ うるさい。電話。うるさい。だれ？ 松倉？ 妹が友達を池に落とした。

三人 我が家、は、おばあちゃん、私たち、の、4人、が、下国市御熊川町3,2の一軒家に棲んでいた、頃、の話。

暗転

幸田家の庭。夜。雨はほつりほつりと。奥には縁側。上には屋根。

三女、頭に骨壺を乗せて庭の片隅で踊っている。

三女 ちよーそー

カラスが遠くで鳴く。

三女 ちよーそー

祖母、縁側に登場。その様子を見つけ微笑み、去る。

三女 ちよおおーそおおー

間

家のチャイムが鳴る音。三女、にっと笑う。

三女 はい。

三女、骨壺を縁側に置き、玄関へ向かって去る。
やがて、松倉と共に居間へ戻ってくる。松倉の表情は三女に比して暗い。

三女 まーちゃん。

松倉 ・・うん。あ、

三女 なに。
松倉 ・・ううん。
三女 へへ。ほんとに来たんだ。
松倉 ・・だめだった？
三女 別にいいよ。
松倉 (骨壺に気づき) ・・なにそれ。
三女 (骨壺を掲げ) ちよーそー。
松倉 ・・鳥葬？
三女 え、知ってるの？
松倉 鳥が天国に連れていってくれるって。お母さんが。
三女 ・・へえ。でもさ、鳥こないし、もういいかなって。ね。

問

三女 来ないよね。来るわけないじゃん。
松倉 でもお母さんは、信じてたら来るからって。
三女 ほんとにそう思ってる？
松倉 ・・うん。
三女 ほんとのほんとのほんとの
松倉 ほんとだよ！
三女 怒った？
松倉 怒ってないよ。
三女 びっくりするからやめてよ。
松倉 ごめん。
三女 まーちゃんはさ、ちよーそーされたい？
松倉 ・・。
三女 私はさ、いやだな。
松倉 なんで？
三女 だって、怖くない？ 鳥に食べられるの。
松倉 でも鳥は――
三女 ―――怖くない？
松倉 ・・ちよつと。
三女 だよね！ 私もそうだよ！

三女、松倉に握手を求める。
松倉、ためらいながらも、三女の手を取る。

三女 埋めちゃお！ そうしよう！
松倉 え？
三女 (きよろきよろ) いない、よし。

三女、穴を手で掘り始める。

三女 手、痛。シャベル持ってくる。

松倉 ごめん。

三女 ん？

間

三女 なに？

松倉 (スカートから膝を出して)・・・血、出たじゃん。

三女 ・・・うん。

松倉 お母さん、怒ってさ。

三女 ウケる。

松倉 幸田さんの名前言っちゃった。

三女 え？

松倉 ごめんね。ごめんね。

三女 ・・・いいよ。なんか、わかんないけど、なんとかなるでしょ。(穴を掘る)

松倉 でも、うちのお母さん、怒って。幸田さん連れてきなさいって。逃げてきちゃった。

ごめん——

——やる？

三女 え？

松倉 ちよーそー！

三女 ・・・。

三女 ちよおお——そおお—— (骨壺を差し出し) はい。

松倉 いや・・・

次女、縁側に登場。

次女 (松倉を見つけ) 松倉さん？

松倉 はい。お邪魔してます。

次女 ・・・ケガ、大丈夫だった？

松倉 ・・・はい、すいません。

次女 大した事なくてよかったね。・・・お母さん、そろそろ来ると思うよ。

三女 お母さん！

次女 松倉さんの。

松倉 ・・・ありがとうございます。

三女 ・・・い姉ちゃんもやる？ ちよおお——そおお——・・・

次女 あんたもおばあちゃん呼んでるよ。

家のチャイムが鳴る。

三女　じゃ、行こっか。

松倉、怖くて動けない。

三女、手をさしだす。

三女　大丈夫。説教終わったら続きしよ。

松倉　・・うん。(骨壺を指さし) それ、だれ？

三女　んーお父さんのお父さんのお母さん。

松倉　え？

三女　知らない人だよ！ 行こう！

三女、骨壺を次女に渡し、松倉の手を取り去る。

次女　ちよつと・・。

次女、骨壺を見る。

間

おずおずと蓋をあけ、中を見る。

次女　お父さん、の、お父さん、の、お母さん・・・お母さん・・・。

次女、勢いよく骨壺に向かって大声で。

次女　お母さああああん！！

その声に気づき、長女が縁側へやってくる。

長女　・・どしたの。

次女　(にっこり笑って) なに？

長女　・・いや

次女　なに？

長女　・・大丈夫？

次女　警察、帰っちゃったんだってね。

長女　ばばあが適当な事言って帰したんだよ。

次女　おばあちゃん、お母さんの事嫌いだったんだよね。

長女　多分ね。

次女 だからさ、私は仕方ないって思うよ。
長女 何が。

次女 お母さんが家から出ていったの。
長女 ・・でもさ、一言ぐらい言ってくれたら――

次女、 また勢いよく骨壺に向かって叫ぶ。

次女 ああああああああああ！！！！

間

次女 やってみる？ スッキリするよ。

長女 ・・怒ってるの？

次女 (骨壺の中を見せて) ほら、お父さんの、お父さんの、お母さんだよ。

長女 え？

次女 知らない人だよ。ちょーそ―― (三女の真似をする) うけるね。これ。

長女 やめてよ。気持ち悪い。

次女 気持ち悪いよね。うん。これ、仏壇に戻しとくね。

長女 ・・うん。

次女 やってみなつて。一回。

長女 ・・。

次女 家族に合わせるの、嫌？

長女 ・・うん。

次女、 骨壺を長女に渡す。

長女、 叫ぼうとするが、次女の目が気になり声が出せない。

次女、 気を使い鼻歌を歌いながら去る。

長女、 庭の隅まで出る。

奥、曾祖母が下手から上手へ、摺り足で登場し、去っていく。

長女、 思い切り息を肺に溜め込んだところへ、三女と松倉が戻る。

長女、 不意に骨壺を隠す。

三女 ね、大丈夫だったでしょ。

松倉 ありがとう。

三女 あれ、にい姉ちゃんは？

長女 部屋じゃないかな？

三女 あれ、知らない？

長女 ん？

三女 お父さんのお父さんのお母さん。

三女と松倉、いたずらっぽく笑う。

長女 知らないよ。そんな人。

三女 あ、持ってる。

長女 ・・あの子が置いてったから。

三女 返して。

長女 ・・うん。

長女、三女に骨壺を返す。

奥から祖母がやってくる。にこやか。

祖母 松倉さん。

松倉 本当にすみませんでした。

祖母 いいのいいの。そんな事より私驚いちゃって。ね、お母さん、いい人よねえ。お母さん、教会でも一番真面目なのよ。

松倉 ・・はい。

三女 ちよーそー――

祖母 ふふ。2階に新しいお布団敷いておくから、今日はゆっくりして行ってね。

松倉 ありがとうございます。

三女 ねえ、今日のご飯なに？

祖母 おにぎりいっぱい作ろうね。

三女 やったー

祖母、長女を見る。

祖母 お姉ちゃんも、それでいいよね。

長女 ・・うん。

三女 やったー ちよーそー――

祖母 もう。この子ったら。

祖母、笑いながら去る。

長女 ・・外面の良さビビるよね。(松倉を見て) あ、ごめんなさい。

松倉 うちも同じなんです。

三女 じゃ、やろっか。

松倉 ん。

三女、松倉、庭の隅に穴を掘り始める。

長女 え？

三女 ここにね、うんとうんと深く穴を掘るんだ。ざっざっ。
長女 なんて。
三女 どそーすんの。ざっざ。
松倉 埋葬じゃないの？ ざっざ。
三女 わかんない。ざっざ。
松倉 誰だっけ。ざっざ。
三女 お父さんのざっお父さんのざっお母さんざっざっ。
松倉 誰？ざっざ。
三女 知らない。ざっざっ。
松倉 いいの？ ざっざっ。
三女 だって。ざっ。まーちゃん。ざっ。ちょーそー。ざっ。嫌なんだよね。ざっ。
松倉 わたしは、ざっざっ、うん。ざっざっ。
三女 じゃあざっ。いいじゃんざっ。知らない人なんだしざっ。

その背後、曾祖母がうーうー言いながら横切る。

三女 いいんだよ。ざっざ。嫌じゃないほうでやろうよ。ざっざっ。嫌なこと、ざっざ。し
なくていいよ。ざっざ。ざっざ。嫌なこと、ざっ、思い出さなくていいよ。ざっざ。
松倉 楽しい事やろうよ！ ざっざっ！
松倉 ありがとう。ざっざっざっざ。

二人、穴を掘っていたが、松倉だけふいに手を止める。

松倉 ねえ。
三女 ん？ ざっ。
松倉 あれ！嫌だった！
三女 なに？
松倉 私が、こけた時の真似、嫌だった！
三女 ・・・ざっ！ ざっ！ ざっ！ ざっ！ ざっ！ ざっ！ 全然！ ざっ！
三女 気づかなかった！ ざっ！

三女、深く謝る。

松倉、三女の手を取る。

松倉 いいよ。
三女 ごめんね。
松倉 いいよ。
三女 ありがとう。
松倉 続きやろっか。
三女 うん。

三女・松倉 ぎっぎっぎっぎっぎっぎっ
松倉 楽しいよ。ぎっ！ 今！ ぎっ。
三女 よかった！ ぎっ！

二人、どんどん深く掘っていく。

三女 あ。

三女、松倉、止まる。

三女、ゆっくりと穴から何かを取り出す。

三女 歯。

松倉 え。

長女 歯。

三女 ほら。いっぱい出てきた。わあ。

三女、宝物を見つけたように取り出ししていく。

松倉、恐れ、穴から離れる。

長女は穴に近づく。

長女 そこらへんに埋めてたね。忘れてた。へー。

三女 私のかな。にい姉ちゃんのかな。

長女 分かるわけじゃないじゃん。あ、(次女を)呼んでこよっか。

三女 こんなに残ってるんだね。骨ってすごいな。

長女、次女を呼びに去る。三女、穴からじゃんじゃん歯を取り出す。

松倉は三女から遠ざかり、

松倉 ・・ねえ。

三女 ん？

松倉 投げないの？

三女 何を？

松倉 歯。

三女 (笑って) 歯は埋めるんだよ。

松倉 普通はさ、屋根に向かって投げるでしょ。

三女 そうなの？

松倉 普通は、そうだよ。ちひろちゃんも前投げたって言ってた。

三女 ふーん。うちは埋めるよ。幸田家は、埋めるの。

松倉 そっか。あ。うん。じゃあ、私、帰るね。

三女 ・・あ。今私グラグラなんだ。ここ。

三女、ぐらぐらになっている乳歯を引っこ抜こうとする。

松倉 え、え、ちょっと、ダメだよ。

三女 でも！ もう抜けそうだし！

松倉 手、洗ってからじゃないと。

三女 大丈夫だって！

三女、最後の乳歯を引き抜いた。

松倉 ちょ……

三女 ……血の味がする。

松倉 はやく口ゆすごう！

三女 やあ！！

三女、天井に向かって投げる。

かんから

三女 いえい。乗った。

……かんからかん。

屋根から落ちてきて、穴に入ったようだ。

三女 どれか分かんなくなっちゃった。ウケる。

松倉 ほら、血、出てるよ。

三女 へへ。

松倉、三女の手をひき家の奥へ。

長女と次女、戻ってくる。

長女 何、どうしたの。

三女 なんでもない。

松倉、三女、去る。

長女 ほら、懐かしくない？

次女 なに。

長女 歯だよ。

次女 あー

長女 他家はさ、投げるんだって。私、最後の歯の時に初めて知ったよ。

次女　ごめん。私は投げた。

長女　え？

次女　いや、他の家は埋めないでしょ。

長女　らしいね。

次女　だから最初の歯だけだよ。埋めたの。あとは投げた。

長女　お父さんに言われなかったの？

次女　こっそりね。

長女　そっか。私、埋めてたよ。律儀に。でもさ、最後の歯だけは投げてみようって。

長女、振りかぶる。

長女　うちだけ？って、怖くなって、ギリギリグラグラの最後の乳歯を、えいや！と引き

次女　ちぎって、天高くめがけて、投げた。

長女、投げる。かんからかん。

長女　私の最後の乳歯は、雨どいにぶつかって、ころりと地上に向かって、落ちてきて、

結局いつもの穴に吸い込まれていった。私たちは、友達の家とは違うんだって、なかなか理解した。

家の奥から、祖母の怒鳴り声が聞こえる。

松倉が謝っている声も聞こえてくる。

次女　異常だよ。うちは。

次女、骨壺に近づこうとする。

長女　ねえ。

次女　ん？

長女　埋めよう。仏壇。

次女　え？　めっちゃ怒るよ。

長女　あってもなくても怒るんだよ。おば・・・お父さんの、お母さんは。

次女　お父さん、遅いね。

長女　帰ってこないんじゃない？　そんな気がする。

長女、穴から誰のか分からない歯を取り出す。

長女、えいやと屋根に向かって投げる。音はしない。

三女、戻ってきて、縁側の隅に座る。二人には顔を向けない。

三女　まーちゃん帰るって。

長女 何怒ってたの。
三女 私、血出ちゃって。
次女 え、松倉さんにやられたの？
三女 ううん。歯抜いたら出た。なのに、お父さんのお母さんが、勘違いして、怒っちゃって。わけわかんないね。はは。
次女 ちゃんとゆすいだ？
三女 もう止まった。
長女 あの人（祖母）は？
三女 家まで一緒に行って、お母さんに報告するって。
次女 あんたは。
三女 ・・ばいばいって。
次女 ちよつと薄情じゃない？
三女 別にまーちゃんの事、そんなに好きじゃないし。
長女 楽しそうだったじゃん。
三女 穴を掘るのが楽しかっただけだよ。

沈黙。三女、今にも泣きだしそう。

長女 掘ろう。
三女 ・・。
長女 せっかくだからさ、もつともつと掘って。いろんなもの埋めちゃおうよ。
三女 ・・何埋める？
長女 仏壇とかテレビとか、なんでもいいよ。歯、以外。
三女 面白そう。
長女 ほら、来な。まず仏壇！

長女、骨壺を次女に渡して、三女の手を取り家の奥へ。

次女 ・・変わりそうだね。うち。

次女、庭に出て穴を少し掘る。

次女 ざっ。ざっ。ざっ。ざっ。

次女、そこに骨壺を置く。
骨壺と穴に向かって大声で

次女 お母さ——ん!!!!!!

スーパールのビニール袋を持った試食の女（母）が縁側に登場。

次女、気が付く。
母も少し気まずそうな笑顔を浮かべるだけ。

間。

長女と三女の声が聞こえてくる。

長女 ちよつと！

三女 重いんだもん。食べてから。おなかすいちゃった。

長女 あんた歯抜けてすぐによく

三女、おにぎりを頬張って長女から逃げて庭へ戻ってきて母に気づき、立ち止まる。
後ろから長女もやってくる。

長女 (母に気づき) あ。

間

母 よ。久しぶり。・・・おばあちゃん、いるかな？

長女 ・・・あの人は、今出てて。

母 そう。

次女 どこ行ってたの。

母 ・・・お父さんと、ちよつとね。

間

母 あ、ほら、これ貰ってきたよ。好きなやつ。

ビニール袋を差し出す。誰も動けない。

鳥が遠く鳴いているが、4人には聞こえない。

母 ・・・ごめん。

三女、おにぎりを握りしめたまま母に抱き着き、母のお腹の中で泣く。

暗転

暗闇の中、曾祖母を抱きしめている祖母が見える。

祖母 お仏壇こんなにしちゃって。私はどこに居たらいいのさ。

曾祖母

お墓でいいじゃない。

祖母

私、まだ死んでません。それに、お義母さんも、鳥葬してもらうまではここにいなきやいけないですよ。

曾祖母

でも、鳥葬する時にね、支払うお布施ね、用意できなかったでしょ。

祖母

・・・

曾祖母

だからさ、私こんなに宙ぶらりんになっちゃってね。

祖母

・・・

曾祖母

お父さんと一緒に、お墓に入っておけばよかったね。

祖母

今更。今更、そんな事言わないでもらえますか。

母がやってくる。幸田家の居間。

母

お久しぶりです。

祖母

・・・今更。

母

正式に離婚させて頂く事になりました。

祖母

今更。

母

あの子たちの様子は、時々見に来ます。

祖母

今更。

母

今日はこれで失礼します。あの人帰ってくるとややこしいんで。

母、去ろうとするが、

母

ごめんなさい。あの子たちのためにも、もう、その仏壇、捨ててくださいね。新しい仏壇買ったりでないでくださいね。

祖母

・・・(小声で) お、仏壇。

母

すいません。言いすぎました。信じるのは、お義母さ・・・みほさんだけにしてくださいね。迷惑なんで。ひいおばあさんもいい加減お墓に・・・いえ。今までありがとうございます。あの人にも、あの子たちの事、ちゃんと見ておくようにしっかり言っておきましたから。

祖母

あの子にあったの。

母

やっとな押ししてもらいました。

祖母

そう。

母

あの子たちもと思ってます。これからは弁護士さんを通じてお話させて下さい。

祖母

そう。

母

私、もう行きますね。

母、去る。

曾祖母、手を振り母を見送る。

暗闇の中、祖母、曾祖母をぎゅっと抱き留める。

父もやってきて、その群れに加わる。

暗転

暗闇の中、音楽。

長女、次女、三女、登場。

それぞれの別の場所で語る。

長女

あの日以降、母も、父も、家に戻る事はなかった。私も家を出る準備を始めた。私はどこにだっていける。何にだってなれる。根拠のない自信に溢れていた。るるぶのお陰かもしれない。

次女

私たちがいるのに、酷い話だなと思った。でも、私はあの日、母から連絡先を聞いた。母にたまに会う日々が日常になった。そんな日常が、丁度良くなっていった。

三女

おばあちゃんはぶつぶつとしか言わなくなった。私がおにぎりを結ぶようになった。(少し味見をし) 味しない。まあいっか。

長女

高校卒業と同時にバイトして買った中古の軽で、下国から大阪に出てきた。人の群れ。ビルの群れ。泡立つくつきい川。大阪だと車は何かと不便で、中古の自転車を買った。さすべえも買ってみた。この街に早く馴染みたかった。

次女

高校卒業と同時に、姉を頼って大阪へ。田舎から出てきて不安だったけど、街と近くの商店街は何か刺激的で。でも、いつの間にかなんて事ない日常になった。家から見える東横堀川は夏になると時折匂うけど、高速道路を見上げるように流れる様子は見ていて飽きない。たまに姉と一緒にドライブ。長堀の入口から東横堀川に添って南下して千日前通を西へ折れたら難波を下に見て北に折れて本町、中之島ジャンクションを経由して京都方面へ直進。太陽の塔を左手に見ながら環状線の遠心力を使って大阪を飛び出ていく。下国までは4時間ぐらいかな。でも途中のパーキングエリアで唐揚げとおにぎりを食べて、大阪に戻る。東横堀川はいつもどおり、道頓堀を経て、大阪湾へ向かって絶え間なく注ぎ込む。日常。

三女

学校と家の往復。おばあちゃんは相変わらず。たまに母が訪ねてくる。でもおばあちゃんが帰って怒るので、すぐに帰る。日常。

長女

生まれてはじめての海外旅行。本当はフランスに行きたかったけど、物価が安いしバインミー美味しそうだからベトナム。自分のお金で、自分の計画で、初めて乗れた飛行機。飛行機が加速するときにかかるG(ジー)が、ふわりと空中に浮かんだほんの一瞬、無重力みたいになって、なんでか泣けた。すごく泣けた。安い便だったので台湾でトランジット。大阪より10度暑い。ベトナム、ホーチミン着。台湾より10度暑い。下国より25度暑い。まるで別世界。そっか、ここは昔、フランス領だったんだ。バインミーうま！るるぶにもそう書いてた！

次女

母が、成人おめでどうって中華料理を食べさせてくれた。上海蟹。美味しい。ありがとう。言葉はあまり交わさなかった。お酒を初めて飲んだ。紹興酒。辛い。美味しい！酔った！・再婚？くそ！おめでどう！

三女

おばあちゃんは、ついに何も話さなくなった。こっそり買った小さい仏壇にも話さなくなった。たまにテレビに向かってお話している。お姉ちゃんとお母さんには言わな

かった。言っても面倒だろうなって、なんか思った。たまに、まーちゃんが家に来てくれた。バイトしてお金貯めるって。お母さんが昔働いていたスーパーだ。ウケる。なにが？ スーパー潰れるし、お金貯まったから、教会の人頼って東京に行くって。そうか、がんばりなって、おしまい。

知らない番号から着信。無視。

知らない番号から着信。無視。

三女 お父さんから電話。「元気か？」って。元気だよって。「それはよかった」って。ザリガニ見つけた？って聞いたら、「ああ。元気でな」って。切れた。

長女 テレビをつける。

次女 ニュース。

三女 下国市の再開発で埋め立て工事を行っていた現場で、男性の遺体を近隣の住民が発見。死因は溺死。

長女 数日後、捜査中に池の水が汚染されていた事が発覚。

次女 少なくとも数年前から池に隣接しているガスタンクの外壁が腐食し、有害物質が流れ込んでいた可能性がある。

三女 男性の死因とは無関係。腐食を放置していた原因を市の委託業者から聞き取り開始。

長女・次女・三女 お母さんから着信。

暗転

幸田家の縁側。十数年経った夏。蝉の鳴き声。

三姉妹は喪服を着ている。

長女は骨壺を脇へ置き、縁側に座って外をぼんやり眺めている。

次女も縁側に座って外をぼんやりと眺めている。

三女は家の奥側を見て立ち尽くしている。

長女 いろいろお疲れ様。

三女 ほんと。

次女 お母さん、すぐ帰っちゃったね。

長女 いづらいでしょ。

次女 ばあちゃん、あんななんだから、別に大丈夫なのにね。

長女 (三女に) ちょっと、なんで言わなかったの？

三女 言っても仕方ないじゃん。どうせ下国には帰ってこないでしょ。

長女 それは、まあ。うん、ごめん。でも、

三女 でも？

長女 家族だから。

次女 お。

三女 よく言うよ。

長女 だって

三女 そっちは、楽しい？

長女 ぼちぼち。もうこつちが普通になっちゃったから楽しいかなんて分かんないよね。
次女 10年以上か。こつちは変わらんないね。
三女 変わったよ。随分。幼稚園は駐車場になったし、池も無くなるし。この家も無くなるしね。

長女 あの人よく許したね。
三女 来月施設に入るからさ。私一人だと広すぎる。
次女 どこ住むの？
三女 まだ決めてない。
長女 大阪来たら？ 不動産屋さん紹介するよ。
三女 下国にいるよ。
次女 ええ、そうなの？
長女 彼氏の家とか？
三女 いないよ。おばあちゃんに付きつきりだったし。

問

次女 そっか。あ、大学は？
三女 私、もう25だよ。
長女 まだ若いんだからさ、今からでも
三女 いいよ。今更。私は私で好きにするから。
長女 だったら尚更さ
三女 今更だよ。私、ずっとここにいたんだよ。お姉ちゃんたちと違って。
次女 お母さんに話した？
三女 あっちにだって家族いるんだし。面倒でしょ。

問

三女 いつまでいるの？
長女 仕事あるから、明日には戻る。人少なくなってきた。
次女 私も。
長女 車乗っていきなよ。
次女 ありがと。でも切符取っちゃったから。
長女 そっか。
三女 四十九日には戻ってくる？
長女 いける、と思う。
次女 がんばる。
三女 それ（骨壺）お墓に入れるだけだから、私やっとくし無理しなくていいよ。
長女 そういうわけにはいかないよ。
三女 骨だよ。ただの。
次女 流石に、ね。

長女　　なんかそういうサービス無いのかな？　四十九日代行みたいな。

長女、スマホを取り出し検索を始める。

三女、居たたまれず去る。

長女　　え、え、何。

次女　　ちよつと！

次女、三女を追いかける。

蝉の声、じわじわと部屋に浸食する。

祖母が、縁側を下手から上手へ移動する。

長女に向かってにっこりと微笑み、上手へ去る。

長女、固まって何もできず見送る。

三女、シャベルを持って戻ってくる。

三女　　ここにさ、むかし穴掘った事、覚えてるよね。

長女　　え。どうだっけ。

次女　　掘ってたね。

三女　　何埋めたんだっけ？　ねえ？　私、覚えてないんだ。何したか、何があったか、何話したか、全然覚えてない。

次女　　・・・お母さんが離婚届持ってきた日だっけ。

長女　　あ。

三女　　私、何も覚えてない。何もなかったのかな。私、ここで、何もなかったのかな。

三女、シャベルを持つ手に力を入れ、穴をじっと見つめる。

何かを思い出す為に、じつと穴を見る。

三女　　むかし、私は、ここに、穴を掘った。すぐくすぐく深く掘ったと思うんだけど、でも、それはちっちゃい時の記憶だから、今の私から見たら、すぐくすぐく浅いものだったのかも知れない・・・緊張するね。記憶を掘り起こすっていうのは。私、ここに、何を埋めたんだろうな。楽しみな。嫌な物、埋めてなきやいいな。誰かに掘りおこされてなきやいいな。

ざっ、ざっ、ざっ、ざっ、と穴を掘っていく。

穴の中。

父と母が食卓を囲む。

三姉妹はその様子を遠くから見ている。

母 お父さん、ね、鮮度。艶。見て。他の家じゃ絶対にこのレベルのザリガニ出さないから。あ、ザリガニはどこの家でも出してないか。あは。うるさいよ。

父 ほら、立花神社の裏に池があるでしょ。

母 ……

父 立花池産。

母 まさか。

母 近所のおじいさんがね、取ってくるの。で、うちのオーナーがそれを買取る。オーナーの大好物だからね。

父 嘘はやめろ。

母 ……冗談でしょ。

母、三姉妹をみて

母 ほら、新鮮なザリガニ、食べていかない？ 食べるだけでいいよ！

父 店じゃないんだぞ。

長女 ええー？ザリガニ？

次女 エビフライがいい。

三女 ザリガニだって。

母 うちの惣菜コーナーのエビはね、棄てるようなちっちゃい、味のしないエビを使ってるんだよ。それを朝何回使い回したかわからないような油で揚げて、昼過ぎまで残ったら同じ油で二度揚げして、あつため直して、味のしないエビからさらに味を抜いて、夕方まで売れ残ったものなんだよ。

長女 ええ？

次女 うそ

三女 やだ。

母 それに比べてこのザリガニはフランスから昨日届いたばかりでぷりっぷり。油はしっかり味のしゅんだ3年もので素揚げに軽くお塩で完璧。外はカリッ、中はジュワー。奥はフランス。グラムでなんと120円。

長女 フランス！

女2 食べたい！

女3 私も！

父、ちゃぶ台をドンと叩いた。三姉妹、後ろにすつと下がる。

父 ……フランス産？

母 この空も、海も、どこかで必ずフランスにつながっているのよ。

父 ……産地偽装だろ。

母 冗談。立花池のザリガニよ。

父 ……え、本当に？

次第に記憶に刻まれた音やにおいが穴からあふれ出し、幸田家と三姉妹を包んでいく。

ざっ。ざっ。ざっ。ざっ。

長女 蝉が息絶えて

次女 土にかえる。

三女 鳥が啄んで。

長女 消化されて。

次女 土にかえる。

三女 私たちもいつか。

長女 どこかの土地で。

次女 土にかえる。

三女 どきどきするね。

ざっ。ざっ。ざっ。ざっ。

ゆっくと幸田家は闇に紛れていく。

三人

下国市御熊川町3・2の一軒家。は、持ち主を失って崩れ去る。街は変わる。幼稚園は駐車場になって、立花池はいつか埋め立てられて、山田ストアはコンビニになって。今、いつか埋めた私たちの乳歯が、じゅわり、と、土に溶けた。

終わり